

D-11 すまいにおける安全性・快適性について—老人の生活行為との対応  
鹿兒島女子短大 ○古川恵子 今村節子 松浦勲

目的；すまいは、そこに老人が住んでいる場合は尚更のことであるが、老後のことも考慮して計画されるべきである。中でも、取得困難な持家では、後の増・改築や、移り住むことが容易でないことを併せ考えると、計画当初からそうすべきであるといえよう。また、借家、その他においても、老人にとっても、住み良くなるべきである。

ここでは、特に、すまいの安全性・快適性が考慮されているかを、老人同居世帯、非同居世帯共について検討する。一方、住宅事情、経済的事情と、同居・別居との関連、及び若い世代の、すまいの一部における認識についても検討する。

方法；勤務短大（県庁所在地、人口50万弱の都市にあり、学生数2000名）における学生（18-20才）600名を対象にアンケート調査

結果；建築年数の長短に拘らず、殆どのすまいは、特に老人の各生活行為に対応しての計画はなされていらないことがわかった。